九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『落窪物語』の典薬助をめぐる求婚難題譚考 : 『竹取物語』の受容を中心に

梁, 丹
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/26935

出版情報：語文研究. 112, pp.1-21, 2011-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『落窪物語』の典薬助をめぐる求婚難題譚考

――『竹取物語』の受容を中心に――

梁　丹

一　はじめに

継子譚は、一般に、「虐め（迫害）→逃走・流離→救出→報復と幸福な結末」といった構造をもつ。継子は、実母の死後、実父の邸に迎えられるが、そこで、実父の北の方である継母から虐めを受ける。そして、或る事件を契機に、実父の邸から逃走し、流離へと向かう。そのさい、継子は往々にして皇族の血筋を引くため、「継子譚」は「貴種流離譚」の一種だとも言われる。[注1] 継子譚の構造から、継子の「逃走・流離」という展開は不可欠な要素であるが、そのような筋に直接に働きかける人物として、好色な老人（王朝物語）や武士（御伽草子）等が登場する。[注2] 彼らは継母に加担し、継子虐めに拍車をかける人物であるが、継母に、姫君を盗み出し、妻にするか、殺すように指示される。しかし、事前に噂を聞いて継子が逃走するか、武士の同情により見逃されるか、実母の霊によって助かるか等して、継母の計画は失敗し、継子は流離の途中、男主人公と結ばれ、幸福を掴む。このように、好色な老人や武士の登場は、虐めから逃走・流離へ向かう物語の展開に大きく働きかけるものなのであるが、彼らと継子との間には、実質的な交渉はほとんど見出せず、しかも彼らは、その場限りの登場で、再び登場するようなことはほとんどない。そのような中で、『落窪物語』の場合、事情はやや異なる。

『落窪物語』には、『古本住吉物語』の「主計頭」[注3]（現存本では「主計助」とするものが多い）に匹敵する人物として「典薬助」が登場する。現存『住吉物語』によれば、両者は年齢

的特徴のみならず、人物描写・特殊表現に至るまで酷似している。[注4] しかし、それは両者の人物設定に限ることで、物語の展開からするとかなり異なる。現存『住吉物語』の場合、姫君を主計頭と結婚させようとの話は持ち上がるが、それを事前に知った姫君の逃走で、主計頭と姫君との間に実質的な交渉は生じない。一方、『落窪物語』の場合、典薬助は、巻一の終わりから巻二にかけて登場し、同じく結婚の話が持ち上がり、落窪の女君の部屋に二夜続けて入る等、二人の交渉はきわめて詳細に描かれている。つまり、典薬助の存在は、現存『住吉物語』の主計頭と較べてもかなり大きなものとなっており、なおかつ、ほかの継子譚には見られない展開になっている。

典薬助と落窪の女君との間に起きた「結婚騒ぎ」は、落窪の女君に立派な男君（少将道頼）が出来たことを知った北の方（実父の正妻で、落窪の女君にとっては継母である）が、嫉妬し、六十ばかりの典薬助に「からみまはせ」（ママ）（巻二・九八頁）[注5] ようと奸計をめぐらしたことに端を発する。従来の研究が明らかにしたように、この一件は、落窪の女君からすれば、もっとも残酷な試練で、「性的虐待」、「性的侵犯」以外のなにものでもない。[注6] しかし、これを典薬助の側から見れば、北の方（代理の親）の許可を得た上での「求婚」である。そこで用いられる「あはせむ」という言葉が端的に示すように、典薬助本人も周りの人々も、二人の関係を結婚と考えている。また、この事件に照応する報復が、中納言家の四の君を「面白の駒」（兵部少輔）と結婚させるものであったことも、それを裏付ける。その一方で、「焼石」を求められたり、「入室妨害」されたり等、いろいろと難題が突き付けられることで、「求婚難題譚」[注7] 的展開にもなっている。

本稿では、典薬助が落窪の女君を犯そうとした事件を、従来の「性的虐待」ではなく、「求婚難題譚」として再検討する。その際、「物語の出で来はじめの親」（新編日本古典文学全集本『源氏物語』「絵合」巻②三八〇頁）とされる、同じく「求婚難題譚」のモチーフを持つ『竹取物語』との繋がりに注目したい。以下、典薬助の落窪の女君をめぐる「求婚難題譚」（以下、「落窪の女君求婚譚」と略称する）に、五人の求婚者のかぐや姫をめぐる「求婚難題譚」（以下、「かぐや姫求婚譚」と略称する）が投影されていることを指摘し、それを具体的に検討して行きたい。

二　典薬助をめぐる「求婚難題譚」

1　典薬助と「求婚譚」

落窪の女君は、あこぎ（注8）（侍女）と帯刀（男君の乳母子で、あこぎの夫）によって男君にその存在を知られ、落窪の間で密会し、契りを交わすことになる。「露顕（ところあらはし）」こそなかったが、男君は三晩続けて通い、三日の餅を一緒に食べているので、二人の間には自媒による婚姻関係が成立したと見られる。似たようなケースとしては、『源氏物語』の光源氏と紫の上との関係が想起される。しかし、二人の関係は、落窪の女君の親にも、男君の親にも知らされておらず、公になっていないので、世間は二人の関係を知らない。この時点で二人の関係が不安定であることは、『源氏物語』の匂宮と宇治の中の君のケースが思い合わされる。落窪の女君と男君との関係がいまだ公にされていない時、二人の仲を知ってしまった北の方は、落窪の女君を北の部屋に閉じ込め、典薬助と関係を結ばせようと謀る。ここに、自媒での結婚とは異なる、親の強制による結婚が企図されたと見られる。

ところで、物語内における典薬助と落窪の女君との関係がいかなるものであるかについては、「あはせむ」という表現が端的に表していると考えられる。その用例は次のとおりである。

(1)「さらにいとぞいみじき。日に一度なむ、御台まゐりにあけたまふ。かくて構ふるやうは、北の方の御叔父にて、いみじき翁のあるになむ、〈あはせたてまつらむ〉とて、今宵も『部屋に入れ』とて鍵をとらせたまへれど、内外にしかじか固めたれば、立ち居ひろろぎあけつるに、冷えて、かうかうして往ぬ。」　（巻二・一三四頁）

(2)　童なる子の言ふやう、「すべて上のあしくしたまへるぞ。何しに部屋に籠めたまひて、かくをこなる者にあはせむとしたまひしぞ。いかにわびしく思しけむ。御女ども多く、まろらも行く先侍れば……」（同・一四二頁）

(3)　（中納言）帰りたまひて、北の方に、衛門督ののたまへることども、片端より、「典薬助には、まことにや、〈あはせむ〉としたまひし。恥づかしげにのたまへるに、面あかむ心地してなむありつる。」　（巻三・二四九頁）

(1)は、典薬助が入室を妨害され、不首尾に終わった夜、帯刀にあこぎが北の方の悪計について、「女君を〈いみじき翁〉と結婚させようとする」と訴えている場面である。(2)は、落

窪の女君の失踪後、中納言家の三郎君が、「なぜ〈かくをこなる者〉と落窪の女君を結婚させようとするのか」と、北の方に不平をならす場面であるが、この〈かくをこなる者〉は、言うまでも無く典薬助のことである。(3)は、中納言（源忠頼、落窪の女君の実父）が落窪の女君との対面後、帰宅し、「典薬助と落窪の女君を、本当に結婚させようとしたのか」と北の方を責める場面である。このように、落窪の女君と典薬助との関係を、周りの人々は、北の方が「あはせむ」としたもの、つまり結婚であると考えている。

『落窪物語』中には、ほかにも「あはせむ」の例は多数見られ、いずれも結婚を意味すると認められる。

(4) 三の君に御裳着せたてまつりたまひて、やがて蔵人の少将あはせたてまつりたまひて、いたはりたまふこと限りなし。（巻一・一九頁）

(5) 「源中納言の四の君なり。『まろにあはせむ』と言へども、え思ひ捨つまじき人の侍れば、〈君に譲りきこえむ〉と思ひて。」（巻二・一五一頁）

(6) 中将せめて言ひそそのかして、蔵人の少将を中の君にあはせたまへば、中納言殿に聞こえて、いられ死ぬばかり思ふ。（同・一七九頁）

(7) 「三位の中将、交じらひのほどなどに心みるに、物頼もしげありて、人の後見しつべき心あり。これあはせむ。」（同・一八五頁）

(8) 「〈今はいかで三、四の君によき人あはせむ〉と、人知れず見るに、さるべき人のなきこそ口惜しけれ」とのたまひわたる。（巻四・三〇二頁）

(9) 「この晦日に下りぬべかなり。とくしてむ。北の方にさのたまへ。よろしう思ひたらば、ここにてあはせむ」とのたまへば、……（同・三〇六頁）

(4)は、中納言家の三の君と蔵人少将との縁談について、(5)は、男君と中納言家の四の君との縁談について、(6)は、蔵人の少将と左大将家の中の君との縁談について、(7)は、男君と右大臣の女との縁談について、(8)は、落窪の女君夫婦が、中納言家の三の君と四の君の結婚について、(9)は、中納言家の四の君と権帥との縁談について、それぞれ「あはす」「あはせむ」が使われている。これらは、典薬助と落窪の女君との関係についての「あはせむ」の用法と、まったく差異がないといえる。

一方、結婚の当事者である「典薬助」は、落窪の女君と自分との関係をどのように捉えていたのであろうか。

(a) 翁、あこぎに「いかにぞ御心地は」と言へば、「いみじくなむ悩みたまふ」と言へば、「いかにおはせむずらむ」と、わが物顔にうち嘆くを、〈愛敬なし〉と見る。

（巻二・一三一頁）

(b) （典薬助）上下さぐれど、さしたるほどをさぐりあてず。「あやしあやし。戸内にさしたるか。翁をかく苦しめたまふにこそありけれ。人も皆許したまへる身なれば、え逃れたまはじものを」と言へど、誰かはいらへむ。

（同・一三二頁）

(a)は、典薬助が落窪の女君が閉じ込められた部屋に入った翌日、落窪の女君の体調を案じて、あこぎに尋ねる場面であるが、「わが物顔にうち嘆く」とあり、典薬助本人は、まるで婿気取りであることが分かる。(b)は、二日目の夜、遣り戸が開かず、焦った典薬助は、「人も皆許したまへる身なれば」と騒ぐが、この「人」とは中納言であり、また北の方であり、ひいては中納言家全員のことである。つまり、自分は中納言家の誰からも認められた婿である、と力説している。

また、第三者の目から見た典薬助については、

(c) 「不覚なりける御懸想人かな。北の方、いかに〈あさましし〉と思ひたまはむ」と、うちとけて言ひ臥したまへり。

（同・一三八頁）

とあり、落窪の女君が救出され、二条邸に移った後、男君は典薬助のことを、「不覚なりける御懸想人」とからかっている。

さらに、初夜は添い寝だけで終わったものの、次の日、典薬助は後朝の文を送り、返事（あこぎの代筆）をもらうことや、春田宣氏に指摘のある如く、「落窪の女君求婚譚」において、典薬助は、職名ではなく、「翁」と呼ばれることが多く、落窪の女君も「女」と呼ばれることが多いことなどからも、(注9) 典薬助と落窪の女君の関係は、単なる「性的虐待」の加害者と被害者の関係ではなく、典薬助に焦点を当てれば、北の方から結婚許可を得た正当な求婚者で、「求婚譚」的構成をもつ、という読みが可能である。

2 典薬助の求婚と「難題譚」

典薬助は、北の方の手引きで、いよいよ落窪の女君が閉じ込められた部屋に入る。「二人きりの空間－無力な女君－好色な老人」、これだけの条件が揃うと、もはや駄目かと思われたが、結局は無事救出されることになる。典薬助が二晩続け

て女君の部屋に入りながら既成事実を作れなかったのは、落窪の女君とあこぎから課された難題を、克服することができなかったからである。つまり、典薬助をめぐる「求婚譚」には、「難題譚」的要素が含まれている。以下、そのことを具体的に検討する。

【資料Ⅰ】

「御焼石あてさせたまはむとや」と聞こゆれば、「よかなり」とのたまへば、あこぎ、典薬に、「ぬしをこそ今は頼みきこえめ。御焼石求めて奉りたまへ。皆人も寝静まりて、あこぎがいはむに、よもとらせじ。これにてこそ志ありなし、見えはじめたまはめ」と言へば、典薬うち笑ひて、「さなり。残りの齢少なくとも、一すぢに頼みたまはば、つかうまつらむ。岩山をもと思へば、まして焼石はいとやすし、思ひにさし焼きてむ」と言へば、「同じくはとく」と責められてぞ辞びけむやは。〈入り立ちたるやうなれば、いとやすし。志情けを見えむ〉とて、〈石求めむ〉とて立ちぬ。（中略）誰も誰も泣くほどに、翁、焼石包みて持て来たるを、わびて手づから取る心地、おそろしうわびしくおぼゆ。（同・一二四～一二六頁）

【資料Ⅰ】は、第一の難題を示したものであるが、それは「焼石」である。「焼石」とは、石を焼いて、懐炉のように体を温めるもの、「温石」のことである。しかし、これは解決不可能な難題として課したのではなく、あこぎが落窪の女君と、この場を如何に乗り切るかを相談する、時間稼ぎのためのものである。典薬助の噂を聞いた時から、落窪の女君は動揺して泣くばかりで、典薬助が部屋に入って、身体的接触をしてきても、どうすることもできない。「焼石」を求めたのは、もっぱらあこぎの機転によるものである。又、三谷栄一氏に指摘のある如く、「医師の典薬助が診察もしないで好色ぶりを発揮しながら、医師でもないあこぎに焼石のことを言われていそいそと取りに行く滑稽さには、当時の医者に対する批判が含まれている」と見られる。(注10)

【資料Ⅱ】

① 「さて、いつか」と言へば、「今宵ぞかし」と言へば、「今日は御忌日なるを。何か疑ひあらむ」と言へば、「されど、人持たまへるなれば、危ふし、とくなむ」と言ひて立ちぬ。（同・一二〇～一二一頁）

② 「誰そ」と言へば、「かうかうのこと侍るなり。さる用意せさせたまひて。御忌日となむ申しつる。いみじくこ

そはべれ。いかがせさせたまはむ」とえ言ひやらで立ちぬ。（同・一二一頁）

③〈入りにけり〉と、心地もなくて、「『今日は御忌日』と申しつるものを、心憂くも入りたまひにけるかな」と言へば、……（同・一二三頁）

④ いとわびしくて、いたう病む。あこぎ、「今宵ばかりにてこそあれ。御忌日なれば、なほただ臥したまへれ」と言へば、〈さもあること〉とや思ひけむ、「さらば、これに寄りかかりたまへ」とて、前に寄り臥せば、佗び侘びおしかかりて泣きゐたり。（同・一二六頁）

⑤「その胸病みたまひし夜は、いみじう惑ひて、御あたりにも寄せたまはず、あこぎも、つと添ひて、『御忌日なり。今宵過ぐして』と、正身ものたまひし、いみじく惑ひたまひしかば、やをらただ寄り臥しにき。」（同・一四〇頁）

【資料Ⅱ】は、第二の難題を示したものであるが、それは「御忌日」という禁忌である。「御忌日」に関しては、「実母の命日」とする説と、「血の忌、月経」とする説とに解釈が分かれるが[注11]、いずれにせよ、「忌」というタブーを盾に、典薬助から逃れようとしたのである。典薬助は、一度は「御忌日」というタブーを無視し、落窪の女君に挑もうとするが（①と③の記述）、最終的にはタブーという難題を克服することができず、落窪の女君と同寝しながらも、実事なくして一夜を明かす（④の記述）。「御忌日」という難題も、あこぎが言い出したものだが、落窪の女君は「焼石」の場合よりは能動的で、体調不良を訴える演技を見せ（⑤の記述）、典薬助の難題克服を妨害する。

【資料Ⅲ】

① 「明日の臨時の祭に、三の君に見せたてまつらむ、蔵人の少将のわたりたまふを」と、北の方はねきり居るを、あこぎ聞きて、〈いとうれしきひまあるべかなり〉と胸うちつぶれて思ふ。〈今宵だに逃れたまひなば〉と思ひて、遣戸の後さすべき物求めて、脇にはさみてありく。「大殿油まゐれ」など言ふまぎれに、這ひよりて、遣戸の片の樋に添へて、えさぐらすまじく、さしてさりぬ。内なる君は、〈いかにせむ〉と思ひて、大きなる杉唐櫃のありけるを、後を舁きて、遣戸口におきて、とかうしておさへ、わななきゐて、〈これあけさせたまふな〉と願を立つ。（同・一三一～一三二頁）

② 皆人々静まりぬる折に、典薬、鍵を取りて来て、さし

たる戸あく。〈いかならむ〉と胸つぶる。錠あけて遣戸あくるに、いとかたければ、立ち居ひろろぐほどに、あこぎ聞きて、少し遠隠れて見たるに、上下さぐれど、さしたるほどをさぐりあてず。「あやしあやし。戸内にさしたるか。翁をかく苦しめたまふにこそありけれ。人も皆許したまへる身なれば、え逃れたまはじものを」と言へど、誰かはいらへむ。打ち叩き、押し引けど、内外につめてければ、揺ぎだにせず。（同・一三二頁）

③　夜ふくるまで板の上にゐて、冬の夜なれば、身もすくむ心地す。そのころ腹そこなひたるうへに、衣いと薄し。板の冷えのぼりて、腹こぼこぼと鳴れば、翁、「あなさがな。冷えこそ過ぎにけれ」と言ふに、しひてごぼめきて、「ひちひち」と聞こゆるは、〈いかなるにかあらむ〉と疑はし。かい探りて、「出でやする」とて、尻をかかへて惑ひ出づる心地に、錠をついさして、鍵をば取りて往ぬ。（同・一三三頁）

④　翁は、袴にいと多くしかけてければ、懸想の心地も忘れて、まづとかくかき洗ひしほどに、うつ臥しうつ臥しにけり。（同・一三四～一三五頁）

【資料Ⅲ】は、第三の難題を示したものであるが、それは「入室妨害と寒夜」である。今夜を無事に過ごせば、明日には救出される、という目処が立ち、あこぎは外側から、落窪の女君は内側から、引き戸が開かないようにいろいろと工作をする。その結果、夜、典薬助は部屋の鍵を持って来るのだが、引き戸を開けることができず、うろうろしている間に、十一月の冷え込みのため、腹を壊して慌てて逃げるように出て行くという、滑稽な失敗をする。「入室妨害」という難題において、落窪の女君の行動は、例えば①の傍線部のように、これまで以上に積極的なものとなっている。

以上に確認してきた如く、典薬助は「焼石」、「御忌日」、「入室妨害と寒夜」と、次々に難題を突き付けられ、それらの難題を克服しきれず、「求婚」に失敗する。それどころか、粗相をする等の大失態をしでかす。『竹取物語』の場合、五人の求婚者への難題は、全てかぐや姫本人が課したものであり、現存『住吉物語』の場合、主計頭の噂を聞いた住吉の姫君は、主体的に住吉の尼君と連絡を取り、住吉に避難して、難を逃れる。一方、「落窪の女君求婚譚」において、落窪の女君の能動性は前者ほどではなく、むしろ、あこぎが主役である。しかし、「焼石」、「御忌日」、「入室妨害と寒夜」という難題の順に、次第に落窪の女君の関与の度合は高まるので、やはり、

難題を課す主体は落窪の女君と考えてよいのであろう。だとすれば、女主人公が結婚拒否のため、自ら求婚者に難題を課すという展開は、『竹取物語』のそれとも重なるものと見なされる。

三　『竹取物語』の受容―「求婚難題譚」を中心に

繰り返しになるが、典薬助と落窪の女君とをめぐる一件は、典薬助の側からすれば「求婚譚」であり、「難題譚」である。典薬助による事件を「求婚難題譚」として捉え直す時、同じく「求婚難題譚」のモチーフを持つ『竹取物語』との繋がりが、改めて注目されるのである。以下、そのことを具体的に検討する。

まず、「落窪の女君求婚譚」と「かぐや姫求婚譚」との表現上の類似点をまとめ、**【資料Ⅳ】**に示す。

【資料Ⅳ】

「落窪の女君求婚譚」	「かぐや姫求婚譚」
A「あこぎは今は翁を思ひたまはむずらむな」と言へば、あこぎ、いとむくつけく思ひて、「などかさあるべき」と言へば、「落窪の君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」と言ふに……（巻二・一二〇頁）	a この人々、在る時は、たけとりを呼びいでて、「娘を我に賜べ」と、伏し拝み、手をすりのたまへど、「おのが生さぬ子なれば、心にもしたがはずなむある」といひて、月日すぐす。[注12]（二一頁）
B「さて、いつか」と言へば、「今宵ぞかし」と言へば、「今日は御忌日なるを。何か疑ひあらむ」と言へば、「されど、人持たまへるなれば、危ふし、とくなむ」と言ひて立ちぬ。（同・一二〇～一二一頁）	b 大臣答へていはく、「この皮は、唐土にもなかりけるを、からうじて求め尋ね得たるなり。なにの疑ひあらむ」。「さは申すとも、はや焼きて見たまへ」といへば……（四一頁）

C女君、聞くに胸つぶれて、さらにせむかたなし。さきざき思ひつること、物にもあらずおぼえて、わびしきに、逃げ隠るべきかたはなし。〈いかでただ今死なむ〉と思ひ入るに、胸いたければ、おさへて、うつ伏し伏して、泣くことといみじ。（同・一二一頁）

D「ぬしをこそ今は頼みきこえめ。御焼石求めて奉りたまへ。……これにてこそ志ありなし、見えはじめたまはめ」と言へば、（中略）〈入り立ちたるやうなれば、いとやすし。志情けを見えむ〉とて、〈石求めむ〉とて立ちぬ。（同・一二四頁）

E「岩山をも思へば、まして焼石はいとやすし、思ひにさし焼きてむ」と言へば……（同）

Fねぶたがりければ、目くそ閉ぢあひたる払ひあけて、腰はうちかがまりて出でて往ぬ。（同・一二七頁）

G御あたりにだに近くさぶらはば、命のびて、心地も若くなりはべりぬべし。（同・一二九頁）

H「あやしくあひ思ひたてまつりたる童なめり。盗人がましき童にて、くやつが〈よくなさむ〉とて、したるにこそあめれ。」（巻一・一〇六頁）

cいつか聞きけむ、「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上りたまへり」とののしりけり。これを、かぐや姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。（中略）「はや、この皇子にあひ仕うまつりたまへ」といふに、物もいはず、頬杖をつきて、いみじく嘆かしげに思ひたり。（二八～三〇頁）

d「世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ」といふ。（二二頁）

かぐや姫のいはく、「なにばかりの深きをか見むといはむ。……五人の中に、ゆかしき物を見せたまへらむに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらむ……」（二三頁）

eかぎりなき思ひに焼けぬ皮衣袂かわきて今日こそは着め（四〇頁）

fこのことを嘆くに、鬚も白く、腰もかがまり、目もただれにけり。（六七頁）

g翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。（一八～一九頁）

h「かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。家のあたりだにいまは通らじ。男どもも、な歩きそ」とて……（四九頁）

北の方、「あこぎといふ盗人の、かく人もなき折を見つけてしたるなり。」（巻二・一三九頁）

I（北の方）「〈やがて追ひ棄てむ〉と思ひしものを、『使ひよし』とのたまひて、かくつひにまけぬること」と、……（同）

J（北の方）腹立ち叱りながら笑はれぬ。ましてほの聞く若き人は、死にかへり笑ふ。（同・一四一頁）

（典薬助）「翁なればこそ、〈あけむあけむ〉とはせしか」と、腹立ち言ひて立ちていけば、いとど人笑ひ死ぬべし。（同）

iかぐや姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。（二九頁）

jからうじて起きあがりたまへるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つつけたるやうなり。これを見たてまつりてぞ、国の司も、ほほゑみたる。（四八頁）

これを聞きて、離れたまひし元の上は、腹を切りて笑ひたまふ。（四九頁）

【資料Ⅳ】に示したA（a）からJ（j）までの各項目について、簡単に解説を加える。

Aとa…「落窪の君をおのれに賜へれば」とあこぎに言いふらす典薬助の口吻は、「娘を我に賜べ」と伏し拝み、手をすり合わせながら竹取の翁に頼む、五人の求婚者のそれによく似ている。

Bとb…あこぎは「今日は御忌日なるを。何か疑ひあらむ」と「御忌日」を口実に典薬助の入室を断念させようとするが、好色な典薬助は、「されど、人持たまへるなれば、危ふし、とくなむ」と反論し、計画を実行する。一方、かぐや姫は、阿部の右大臣が難題の品である火鼠の皮衣を求めて来ても本物だと信じようとしない。右大臣は、「この皮は、唐土にもなかりけるを、からうじて求め尋ね得たるなり。なにの疑ひあらむ」と言うが、かぐや姫は「さは申すとも、はや焼きて見たまへ」と反論し、ついに火に焼かせる。

Cとc…Cは典薬助の噂を聞いた時の落窪の女君の困惑ぶりであるが、「胸つぶれて、さらにせむかたなし」、「いかでただ今死なむ」、「うつ伏し伏して、泣くことのみじ」

などと表現される。これは、くらもちの皇子が優曇華の花を持ってきたとの噂を聞いた時のかぐや姫の心情表現「胸つぶれて思ひけり」や、玉の枝を前にして、「物もいはず、頬杖をつきて、いみじく嘆かしげに思ひたり」とあるのと、よく似ている。

Dとd…典薬助が落窪の女君の部屋に入った夜、あこぎは典薬助に「焼石」を所望し、「これにてこそ志ありなし、見えはじめたまはめ」と言う。これを受けて典薬助は「〈志情けを見えむ〉とて、〈石求めむ〉」といって出て行く。一方、かぐや姫は、竹取の翁の結婚の口説きに折れて、「深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ」と「深き志」を結婚の第一条件とし、「深き志」を具現する方法として「ゆかしき物を見せたまへ」と提案する。つまり、「具体的な物品をもって深い愛情を見せる」という発想は同じで、表現上の類似も明らかである。

Eとe…いずれも「思ひ」の「ひ」に「火」をかけて「焼く」とする掛詞的表現である。典薬助は「思ひにさし焼きてむ」の掛詞的表現や「岩山」と「焼石」の対比に見られる言葉の技巧を洒落た言い回しとして得意げに使っているが、『落窪物語』におけるこの種の表現は典薬助という人物に集中して使われている。一方、掛詞的表現や洒落を利かした言い回しは、この場面に限らず、『竹取物語』の全体に見られる表現の特徴であるが、特に五人の求婚者の求婚譚に効果的に使われている。

Fとf…老人の特徴として、典薬助と竹取の翁いずれにも、腰の屈曲と目の爛れを持ち出すところが共通する。

Gとg…Gは、典薬助が落窪の女君に後朝の文を送る場面であるが、女君のそばにいるだけで、「命のびて、心地も若くなりはべりぬべし」と言う。一方、竹取の翁は、かぐや姫を見るだけで、「苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり」とする。求婚者と養父という役割設定こそ違うが、年老いた者が若い女をそばにして、若返りする、癒される、という点では類似する。

Hとh…「盗人がましき童」（落窪の女君と男君との仲を知り閉じ込める時）、「あこぎといふ盗人」（女君の失踪後）と、北の方は二度もあこぎを「盗人」と罵り、激怒する。一方、大伴の大納言は「龍の頸の玉」を求めに行ったが半殺しにされる状態で帰り、「かぐや姫てふ大盗人の奴」と罵る。自分を大変な目に遭わせた女性に向かって、「盗人」と罵る表現は一致する。

Iとi…落窪の女君の失踪後、北の方は、あこぎが残した手紙を見て、典薬助と落窪の女君を関係させようとした

計画が失敗したことを知り、自分はあこぎに「つひにまけぬ」と嘆く。一方、かぐや姫は、くらもちの皇子の上京の噂を聞き、「我はこの皇子に負けぬべし」と気をもむ。求婚譚における失敗者の嘆きに「負けぬ」という表現が使われている点で一致する（ただし、かぐや姫の場合は、あとで逆転するが）。北の方とあこぎ（及び落窪の女君）、かぐや姫とくらもちの皇子は、それぞれ対立関係にあり、一種の知恵比べをするが、その敗者の嘆きに「負けぬ」が使われている。

Jとj…典薬助が落窪の女君の件で、いろいろと弁明するが、却って「死にかへり笑ふ」、「いとど人笑ひ死ぬ」と、女房達に笑われる。一方、大伴の大納言が、左右の目に李を二つ付けて帰ってきた時、迎えに来た国司には、「ほほゑま」れ、離別した元の妻達からは「腹を切りて笑」われる。求婚者が滑稽な失敗をして、周囲（本人よりも身分の劣る人々）から笑い者にされ、大恥をかく、という点で一致する。

以上のように、『落窪物語』には、『竹取物語』を念頭に置いたと思われる表現が少なからず指摘できる。もちろん、作者が共に男性の知識人で、筆致上の類似に偶然的な側面があることも否めないが、近似する状況・場面で、細かい表現が類似するのは、やはり作者の意図的な仕業としか考えられない。つまり、『落窪物語』の作者は『竹取物語』を十分に読みこなしていて、表現や人物造型のあれこれを思い浮かべながら、自作に利用したのではなかろうか。

次に、構想上の対応関係を考察し、さらに両者の関係を追求してみたい。

【資料Ⅴ】

	「落窪の女君求婚譚」	「かぐや姫求婚譚」
i	**●北の方（代理の親）による押しつけ結婚＝虐め、試練** 北の方は、落窪の女君に立派な男君が出来たことを知り、嫉妬し、老醜な典薬助と結婚させようとする。落窪の女君にとって、これは継母による押しつけ結婚で、虐めであり、試練である。	**●竹取の翁（養い親）による結婚の強要＝試練** 竹取の翁は、女性としてこの世を生きるかぐや姫の幸福を心から願うがゆえに、結婚を強要する。しかし、「変化の人」であるかぐや姫には、結婚の意志がまったくなく、結婚は試練である。

ii

●典薬助の噂を聞いた時の、落窪の女君の心痛

あこぎから典薬助の噂を聞いた落窪の女君は、北の方の部屋に閉じ込められているので、逃げ隠れる場所もなく、今すぐにでも死んでしまいたいと、物思いに沈み、胸が痛いので押さえて、ひどく泣く。

iii

●典薬助を拒否するために難題を課す（三回）

「焼石」、「御忌日」、「入室妨害と寒夜」

iv

●典薬助への皮肉たっぷりの返歌（あこぎの代筆）

「枯れはてて今は限りの老木にはいつかうれしき花は咲くべき」

（巻二・一三〇頁）

v

●あこぎの協力で、典薬助からの求婚を斥ける

典薬助が落窪の女君に対して、身体的接触をするなど、絶体絶命の時に、あこぎが現れ、その協力を得て、典薬助を斥ける。

●くらもちの皇子の噂を聞いた時の、かぐや姫の心痛

石作の皇子の時は、「仏の御石の鉢」を持って来ても、偽物だとすぐ判別し、焦る様子などはまったく見せなかったかぐや姫だが、くらもちの皇子の時は、まだ難題物である「蓬莱の玉の枝」を見ていないのに、自分はこの皇子に負けてしまうと、胸がつぶれる思いをし、頬杖をついて、ひどく嘆かわしそうに物思いに沈む。

●結婚拒否のために難題を課す（五人に各一題）

仏の御石の鉢－石作の皇子　蓬莱の玉の枝－くらもちの皇子
火鼠の皮衣－阿部の右大臣
龍の頸の玉－大伴の大納言　燕の子安貝－石上の中納言

●かぐや姫からの皮肉たっぷりの返歌

「置く露の光をだにもやどさまし小倉の山にて何もとめけむ」

（二六頁・石作の皇子）

「まことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける」

（三五～三六頁・くらもちの皇子）

「名残りなく燃ゆと知りせば皮衣思ひのほかにおきて見ましを」

（四一～四二頁・阿部の右大臣）

●工匠らの出現で、くらもちの皇子からの求婚を斥ける

かぐや姫は、くらもちの皇子との結婚を拒否できない窮地に追い込まれ、くらもちの皇子は縁側にまで上がり、竹取の翁も寝所を用意するなど、危機一髪の時に、工匠らが現れ、その告発によって、くらもちの皇子を斥ける。

vi

●典薬助の滑稽な大失敗（「ひりかけ」の話）

典薬助は、入室を妨害され、引き戸を開けようと四苦八苦しているうちに、腹を壊し、粗相をする。慌てて出て行き、汚れた袴を洗う内に、懸想の気持ちも忘れてしまう、という滑稽な大失敗をする。

vii

●三日目の昼、男君に救出される

二条邸に移り、幸福な生活が始まる。

viii

●典薬助は、賀茂祭に男君側の人々に蹴られ、それが原因で死ぬ

「かの典薬助は蹴られたりしを病にて死にけり」

（巻四・三四二～三四三頁）

●石上の中納言の大失敗（「燕の古糞」の話）

石上の中納言は燕の子安貝を得ようと、自ら籠に乗って燕の巣を探り、慌てて降りる際に繋が切れて、転落し、腰を折る。息苦しい中でも手に握った物を早くみようと、紙燭をつけさせてみると、子安貝ならぬ燕の古糞であった、という滑稽ぶりである。

●八月十五日の夜、昇天する

月の世界に戻る。

●五人の求婚者の悲惨な結末

石作の皇子と阿部の右大臣の大失敗は世間から笑い草にされる。くらもちの皇子は、ただ一人で深い山に入る。大伴の大納言は半殺しにされる目に遭う。石上の中納言は命まで落とす。

【資料Ⅴ】で示した「構想上の対応」をまとめると、次のような共通点が見られる。

i　親に結婚を強要されるが、その結婚は女主人公にとっては試練であること。

ii　一度は結婚が回避できないのではないかと、はらはらし、精神的な苦痛を味わうこと。

iii　其の試練を乗り越えるために、女主人公は自ら求婚者に難題を課すこと。

iv　求婚者は女主人公から皮肉たっぷりの和歌を受け取ること。

v　成功するかに見えた求婚は、妨害者の出現（女主人公にとっては協力者）で破綻し、女主人公はその助けを得て、求婚者を斥けること。

vi　求婚者は難題を克服しようといろいろと奮闘するが、しかし結局は滑稽な失敗をしでかし、周囲から物笑いの種にされること。

vii　女主人公は試練を克服したため、解放されること。

viii　求婚者は惨めな結末を迎えること。

等である。なお、以下のような、相違点も見られる。

（1）求婚者の身の上が違うこと。典薬助は、身貧しく、老齢で、好色な人物であるのに対し、五人の求婚者は、それぞれ、地位・富・権勢を誇る、色好みの貴公子であること。

（2）「落窪の女君求婚譚」では、一人の求婚者に三つも難題を課すのに対し、「かぐや姫求婚譚」では、五人の求婚者に一つずつ難題を課すこと。

（3）結婚強要の目的が違うこと。落窪の女君の場合、北の方は男君との結婚による女君の幸福の獲得を妨害し、さらに裁縫使用人として扱き使い続けるために結婚を強要する。一方、かぐや姫の場合、竹取の翁はかぐや姫の幸福を願うがゆえに、結婚を勧め、その実現を切望する。

（4）かぐや姫が殆ど一人で求婚者に立ち向かうのに対して、落窪の女君はあこぎと一体となって戦うこと。

以上、「落窪の女君求婚譚」と「かぐや姫求婚譚」との構想上の対応関係について検討した。両者における構想上の相違点はもちろんあるが、**【資料Ⅴ】**に示したような共通点も多々認められる。両者は共に、難題を課す目的が結婚拒否であり、難題を課す人物が女主人公本人である等、「難題婿型」の求婚譚として、話型上の著しい類似が見て取れる。『落窪物語』には、『うつほ物語』や『源氏物語』のように、『竹取物語』との直接の関係を示す徴証は見出せないのであるが、「落窪の女君求婚譚」が「かぐや姫求婚譚」を援用して描かれたものであることは、間違いないのではあるまいか。

四　終わりに

本稿では、継母に加担し、継子を逃走へと導いた典薬助と、女主人公である落窪の女君とをめぐる挿話が、他の継子譚には見られない展開を見せることを指摘し、さらに、それを従来の「性的虐待」ではなく、「求婚難題譚」として捉え直すことによって、新たな意味づけをしようとした。

『落窪物語』が全体を通して「継子虐め譚」の話型をもっていると見ることについて、異論はない。しかし、典薬助の挿話については、虐めの一環として、「性的虐待」を強調するのみの従来の読みには、物足りなさが残る。本稿で明らかにしたように、典薬助に焦点を当てると、この挿話は「求婚難題譚」としての要素を備えており、表現や構想上、「かぐや姫求婚譚」と共通する所が多い。『竹取物語』は、「求婚難題譚」が天人女房譚に挟まれる形で成り立っているが、それに対して『落窪物語』は、「求婚難題譚」が継子虐め譚（虐め譚と報復譚）に組み込まれる形になっている。

ところで、本物語の特徴として、しばしば「パロディ性」ということが指摘されるが、[注13]「落窪の女君求婚譚」も「かぐや姫求婚譚」をそのまま継承したわけではなく、それをパロディ化しつつ取り込んだのではなかろうか。六十ばかりで、身貧しい典薬助は、五人の貴公子よりも、竹取の翁を連想させる人物設定である。『竹取物語』の場合、竹取の翁はあくまでも親の立場で一貫していて、むしろ求婚者に転落するようなことはない。しかし、かぐや姫が翁の元に下された理由が、「いささかなる功徳を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて（後略）」（七一～七二頁）とされる設定には、「異類女房譚」の影が見て取れる。[注14]また、かぐや姫が昇天する間際、この時代における母親の役割を無視して、翁だけに書置きをしてゆく所などからも、親子以上の竹取の翁とかぐや姫との関係を匂わせる。[注15]さらに、『万葉集』巻十六（三七九一番、旧国歌大観番号）に見える「竹取の翁」は、馴れ馴れしく九人の娘（神女）と歌の贈答をするなど、求婚者の立場にいるが、かつてはそのような「竹取の翁」も存在した。

〈翁の求婚者〉としては、『うつほ物語』のあて宮をめぐる求婚者の一人である滋野真菅（「藤原の君」巻に、「年六十ばかり」〈新編日本古典文学全集本①一八一頁〉とある）や、『古本住吉物語』の主計頭等が挙げられ、典薬助は、それらの延長線上に設定された人物なのであろう。思うに、典薬助の落窪の女君をめぐる挿話は、単に「性的虐待」を描こうとしたものではなく、説話や昔話の世界にはあるものの、王朝物語の世界にはほとんど登場しない、婚姻を中心とした〈翁の求婚譚〉という、古い話型の零落した姿でもあったのではなかろうか。

注

注1　三谷邦明氏は日本古典文学全集本『落窪物語』（小学館・一九七二年）の「解説」において、次のように述べておられる。

継子虐め譚は日本文学の基本的話型である貴種流離譚から派生した話型である。（中略）多分、貴種流離譚が継母

子関係を生むような社会的条件によって変型したのが継子虐め譚であったといえるだろう。

また、阿部好臣氏は、「物語文学の話型」三谷栄一編『体系物語文学史』第二巻（有精堂出版・一九八二年）において、〈話型〉間の相互の関わりについて論じ、

例えば、〈貴種流離譚〉の原因となる〈罪〉の問題が、継母と継子という対立構造にとって変わられると、そこに〈継子虐め譚〉が生ずる。また、主人公が最終的に栄華をという形を取らずに、死して神になるという形を踏む時、それは〈本地物〉という形を生みうる。そのように、前者は〈貴種流離譚〉の変型として捉えられる側面があるし、後者にしても、統括概念の遠い変奏として位置づけうるものであろう。

と説く。さらに、同氏は「継子いじめ譚の構造」（「解釈と鑑賞」五六巻十号・一九九一年十月）において、

基本的に、「継子いじめ」という「話型」は、「貴種流離譚」のバリエーションの一つだと考えてよい。

とする。

注2　好色な老人が登場する王朝物語としては、『古本住吉物語』（主計頭）、『落窪物語』（典薬助）等が挙げられる。一方、御伽草子には、武士が登場する話が多く、『ふせや』、『美人くらべ』、『秋月物語』、『花世の姫』、『中将姫本地』、『朝顔の露の宮』等が挙げられる。そのほか、武士ではなく乳母子が登場する『岩屋草紙』や、継母の讒言を信じた実父の追い出しによって流離へと向かう『鉢かづき』などもある。

注3　流布本系『住吉物語』には「主計助」となっているが、『源氏物語』には「住吉の姫君のさし当たりけむをりはさるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ」（新編日本古典文学全集本「蛍」巻③二一〇頁）となっている。これは『源氏物語』の成立以前とされる、『古本住吉物語』の内容によるものと言われる。『落窪物語』の成立時期は、普通十世紀末とされ、本稿では、より古いとされる「主計頭」を採用する。

注4　吉海直人氏「『落窪物語』の乳母達」『平安朝の乳母達――『源氏物語』への階梯――』（世界思想社・一九九五年）に、

『住吉物語』の三の君の乳母は、むくつけ女として悪役ぶりを遺憾なく発揮している。ところが、『落窪物語』では、継子虐めは継母の単独で行われているのである。これは逆に『住吉物語』の継母とむくつけ女を合体していると考えればわかりやすい。その名残が主計頭・典薬助との血縁関係に認められる。「ゑみまけ」という特殊用語を共有する両者であるが、『住吉物語』の主計頭は乳母の兄で七十歳になっている。一方『落窪物語』ではその年齢設定には無理を感じてか、北の方の叔父で六十歳に据え直され、好色面の強化が図られているのである。なお主計頭に関して、古本では「頭」であったようだが、現存諸本の多くは主計「助」になっている。これもあるいは『落窪物語』との交流によって、典薬助にひきずられたのかもしれない。とにかくこういった端役達の設定においても、『住吉物語』からの引用が少なからず認められるのである。（傍線稿者）

との言及がある。

注5　以下、『落窪物語』の引用は、新編日本古典文学全集本（小学館・二〇〇〇年）による。

注6　高橋亨氏は「落窪物語」『体系物語文学史』第三巻（有精堂出版・一九八三年）において、『住吉物語』に比べ、『落窪物語』の継母の虐待は、「落窪に住ませたり、縫物をさせるほか、典薬助という老人に犯せようとするなど、性的な虐待（負の恋愛譚）の要素が重い。」とし、さらに「典薬助による姫君への性的な危機が仕組まれていくところに、中納言と典薬助との機能的な関連を読むことも深層の分析としては可能であろう。（中略）落窪の女君に対する負の性的機能は典薬助がもっている。」と説く。

藤井貞和氏は、新日本古典文学大系本『落窪物語』（岩波書店・一九八九年）の「解説」において、継母の行った虐めについて、「石山詣でに連れてゆかない、とか、もの縫い、調度のまきあげといった多分に彼女の性格に基づくそれはそれとして、計略を巡らして暗黒所に押し込め、食事をぬくという飢餓状態に置」くなどをあげ、さらに「典薬助をして襲わせるという性的強制を加えている」とし、これは、落窪の女君に与えられた「最後の試練」と説く。

また、畑恵里子氏は「落窪の君の試練――典薬助事件をめぐって」（「名古屋大学国語国文学」九三巻・二〇〇三年十二月）において、「典薬助に性を搾取させ、邸に縛り付けたまま酷使し続ける意図を有していた。それは、性の侵犯であり、身体への侵犯である。」とする。

注7　『竹取物語』における五人の求婚譚の話型については、「難題求婚譚」と「求婚難題譚」の二通りの呼称がある。前者の例とし、吉田幹生氏「『竹取物語』難題求婚譚の達成――物語文学成立史一面」『古代中世文学論考』第十集（新典社・二〇〇三年）

河添房江氏「『竹取物語』と東アジア世界――難題求婚譚を中心に」『源氏物語へ源氏物語から』（笠間書院・二〇〇七年）

等が挙げられ、後者の例として、

西本香子氏「『竹取物語』論――求婚難題譚を通じて」（「明治大学大学院紀要〈文学篇〉」二七巻・一九九〇年二月）、島田絹子氏「『竹取物語』における求婚難題譚の役割」（「学海」六巻・一九九〇年三月）、

等が挙げられる。なお、大槻修氏は『王朝物語の姫君』（第六章「清純な女の系譜にそって」）（世界思想社・一九八四年）で、三谷邦明氏は「竹取物語の表現と構造において――〈語り〉の構造あるいは絶望と挫折――」『物語文学の方法Ⅰ』（有精堂出版・一九八九年）の中で、それぞれ、『竹取物語』の構造や五人の貴公子の求婚譚に触れ、「求婚難題譚」と称する。

本稿では、まず「求婚譚」があり、その求婚者に対して「難題」を課す、という順序を考慮し、「求婚難題譚」とする。

注8　「あこぎ」（大系本、新編全集本）、「あこき」（『落窪物語注釈』、新大系本、角川ソフィア文庫本）、「阿漕」（『落窪物語大成』、全集本）と、従来、三種の表記がなされてきた。本稿では、本文の引用を新編全集本『落窪物語』によったため、その本文の表記に従い、「あこぎ」とした。

注9　春田宣氏「落窪物語ノート――典薬の助について――」（「文学・語学」六号・一九五七年十二月）参照。同氏の指摘にある如く、「典薬助」は、落窪の女君との関係において、会話文でばかりでなく、地の文でも職名ではなく、「翁」と表現されることが多い（会話文と地の文で、それぞれ十二例見られるが、地の文の例中、三例は賀茂祭の「車争い」の用例である）。例

えば、

・翁、装束解きて臥して、かき寄すれば、……

（巻二・一二六頁）

・女、少将の君のけはひ思ひあはせられて、いとどあいなく憎し。（中略）。翁のうちおどろく時は、いとどいたく苦しがり病みたまへば、……

（同・一二六～一二七頁）

・女、（中略）翁の文見むことゆゆしうて、「あこぎ、返事せよ」と書きつけて、さし出でたれば、ふと取りて立ちぬ。あこぎ、翁の文を見れば、……

（同・一二九頁）

等である。これは、会話文の中で自分自身を指して言う「翁」や、その場限りの老人を指す場合に使われる「翁」、例えば、

・御車出づべき門はまだ開けざりければ、鍵の預り尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。

（新編日本古典文学全集本『源氏物語』「末摘花」巻①二九六頁）

とは、使い方が違い、「翁」の呼称としては一寸珍しい。ちなみに、本物語で、実父である中納言に五例（内、四例は会話文で自分自身を指し、一例は地の文で年老いた老人を指す）、男君の父親である太政大臣に三例（全部、会話文で自分自身を指す）、「翁」の呼称が見られる。

また、落窪の女君は、巻一で一三例、巻二で七例、「女」の呼称が見られるが、巻一は、すべて男君（道頼）との関係において、巻二は典薬助（四例）や男君（三例）との関係においての表現である。

注10 新編全集本『落窪物語』巻二・一二四頁、頭注参照。

注11 全集本（新旧とも）では「血の忌、月経」とし、「日本古典全書」本、大系本（新旧とも）、「新潮日本古典集成」本では「実母の命日」とする。

注12 以下、『竹取物語』の引用は、新編日本古典文学全集本（小学館・一九九四年）による。

注13 高橋氏は（注6）論文において、

『落窪物語』は古本『住吉物語』として推定される継子物語の構造や要素の引用と変奏、『交野の少将』など先行物語の人物を対象化し批判して取り込み、語りの特性として〈パロディ性〉が指摘できる。

と説く。又、吉海氏は（注4）論文において、

前章で『住吉物語』における乳母の重要性を論じた際、同じ継子虐め譚たる『落窪物語』が、『住吉物語』のパロディとして成立していることを述べた。

と説く。さらに、三谷邦明は、新編全集本『落窪物語』の「解説」において、

男君が豪雨のため通ってこないことを知った姫君が、こっそりと言った言葉が『伊勢物語』百七段の和歌で、糞塗れになって通って来て、睦言を交わしながら同衾する際に、姫君の下句の和歌と男君の会話文にもこの歌が引用されていることは、場面の前後を『伊勢物語』引用で固めていることを意味している。（中略）パロディは、『落窪物語』を支える諸方法の中でも主要な方法だといえる。

と指摘されている。

注14 本格昔話のうち、「異類女房譚」に分類される代表的なものとして「天人女房」、「鶴女房」、「竜宮女房」などが挙げられる。そのうち、異類（女）が人間世界にやって来て、人間（男）と結婚する理由の多くを、人間の功徳や報恩のためとする。竹取の翁の「功徳」が具体的に何を指すのか、必ずしも定かではな

いが、そのためにかぐや姫が下りてきた、という設定は、やはり「異類女房譚」と同種の話型によると考えられる。

注15　（注9）論文参照。

【付記】本稿は、第六十一回西日本国語国文学会（平成二十三年九月十八日　於筑紫女学園大学）における口頭発表に基づくものである。発表に際して貴重なご教示を賜りました先生方に、感謝申し上げます。

（りょう　たん・本学大学院博士後期課程）